



青年期におけるいじめの長期的影響の評価 : いじめ体験からの成長要因を探る

長田, 真人
相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(1):7-15

(Issue Date)

2016-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009713>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009713>



青年期におけるいじめの長期的影響の評価

—いじめ体験からの成長要因を探る—

Investigation of long-term effects of bullying in adolescence -Looking for a grown-up factor from bullying-

長田 真人* 相澤 直樹**

Makoto OSADA* Naoki AIZAWA**

要約：いじめは、多くの青年が学生時代を通じて様々な形で体験してきている。その影響は多くは消極的なものであり、低い自尊心や対人恐怖などが見られ、こうした症状はいじめ直後だけでなく、人格が完成される青年後期まで影響が及ぶとされている。一方で、いじめの長期的な影響には積極的な影響もあるといえ、長期的な影響には積極的な面と消極的な面があるといえる。本研究の目的は、大学生のいじめ当時から現在適応状態の間にある、いじめ体験に関する変数の関係を明らかにすることである。そのため、関西地区の大学生597名に質問紙調査を行った。結果から、いじめを体験したからといって、自尊心が有意に低下するわけではないことが明らかになった。本研究においては、いじめ影響に関する理論図の作成を試みた。ここから、いじめを体験した際の対処行動は、いじめの影響には直接は関与していなかったことや、いじめ体験した際のサポートは、積極的な影響を促進するものとして働くが、消極的な影響を抑制するものとしては働かないことが明らかになった。以上から、いじめ積極的影響といじめ消極影響は、いじめ発生から交わることはなく、いじめ当時の影響からは別々に形成されていると思われる。今後の展望としては、いじめ体験とその後の対人関係に注目していじめの影響を検討していくことが考えられる。

1. 問題・目的

いじめは今や私たちの身の回りにあり、多くの人が学生時代を通して経験してきている。そしていじめは、もはやライフイベントの1つといえるほど学校をはじめとする地域に存在しており、多くの児童がいじめによる心の傷やストレスに苦しんでいるといえる。加えて、いじめは、不登校・自殺などをはじめとした、思春期・青年期の心理臨床的な課題の背景として常に存在してきた。

森田・滝・秦・星野・若井(1999)によれば、いじめを様々な立場から経験した児童は全体の7～8割ほどであり、被害者体験をしたものがその中の2～3割を占めるとされている。いわゆる「いじめ」が日本において注目され始めたのは1980年代であるといえ、中でも1985年は校内暴力を原因とした自殺が複数起こった年であるといえる。国立教育政策研究所(2013)は、これをいじめの社会問題化と呼び、この年からいじめの全国的な調査が開始された。また、1994年を第2次社会問題化、2006年を第3次社会問題化、そして2012年を第4次社会問題化と呼んでいる。世間一般的ないじめの注目は、上に挙げたとおり今までに4回あったといえ、そのすべてはマスコミによるいじめ自殺への注目と当該学校がいじめに対する対応の誤り、また、それに伴う文部科学省のい

じめの定義の変更があったといえる。

文部科学省による、「問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」においては、これまでに3度のいじめの定義の変更がある。現行の定義は2006年の調査において導入されたもので、『「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」とする。』とされている。なお、いくつかの注釈があり、「起こった場所は学校の内外を問わない。」「個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする。」「けんか等を除く。」が盛り込まれている。一方で、現在大学に在学している学生の多くは1994年の文部科学省における定義のもとでも学校生活を過ごしてきているといえる。1994年の文部科学省の定義では、いじめとは、「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」とされていた。なお、注釈として、「個々の行為がいじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うこと」とされていた。文部科学省における定義は、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2016年3月31日 受付)
(2016年7月1日 受理)

1994年以降被害者中心のいじめ定義であるといえる。

また、いじめは日本だけではなく、世界各国に存在し「bullying」という用語で研究されている。餅川（2010）によれば、西欧の研究者の間ではいじめとは「自己防衛の容易でない者に対しての反復的な攻撃行為をいう」という合意ができていているという。例として、スウェーデンのOlweus（1993）によれば、いじめとは「ある生徒が、繰り返し、長期にわたって、1人または複数の生徒による拒否行動にさらされている場合、その生徒はいじめられている」と定義されている。このように、いじめの定義は様々であるといえ、統一をするのは難しいといえる。今回は質問紙による調査であるということも考慮し、調査協力者自身が「いじめである」と主観的にとらえたいじめについて調査していきたいと思う。この方法は坂西（1995）と同様の調査法であるといえる。なお、調査協力者が判断に迷った場合には文部科学省の1994年度版のいじめによる定義を参考に質問紙に回答してもらった。

いじめは一般的には、身体的いじめ・精神的ないじめ・ネグレクト（無視）があるといえ、日本においては精神的ないじめが主流であるといえる（深谷，1996）。文部科学省（2014）による調査では、具体的に以下の9項目がいじめの様態であると考えられており、男女差があることが示唆されている（「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「仲間外れ、集団による無視をされる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」、「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする」、「金品をたかられる」、「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする」、「嫌なことを恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする」、「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる」、「その他」）。

いじめの構造としては、いじめ加害者・被害者・傍観者を中心に、先生や親までを含んだ複合的な構造をしているといえる。森田・清水（1994）によれば、いじめは加害者・被害者・傍観者・観衆の4つの構造からできており、それに対応したいじめへの対処が求められるとされている。いじめに対する個人の対応としては、一般的に反撃・無視・相談があるといえる（菱田・川畑・宋・辻本・今出・中村・李・堺・菅野・三島・島井・西岡・石川，2011）。坂西（1995）によれば、家族や教師に援助を求めることはいじめの解消に強く関係しており、なすがままになることはいじめを悪化させるか同じ状態を維持させることになるとしている。また、一人で反撃をする場合はいじめが悪化することはほとんどなく、いじめを完全に解消できる可能性が高いことを示唆している。このように、いじめに対しての積極的な対応がいじめを抑える方策の1つであるといえる。しかし、一方で、清水・瀧野（1998）は、いじめを被害者個人で解決することは難しく、周りの無関心を装う傍観者が援助行動を行い、いじめを解決できるように集団作りをしておくことの重要性を説いている。

一般的に多くの人が体験されてきたように、いじめはその被害者に、またはその関与者すべてに大きな影響を与えるといえる。中桐・岡本・澤田（2008）によれば、いじめの直後に見られる症状としては次の8因子があるとしている。第1因子は意欲減退で、やる気がない・ふさぎ込んでいる等が含まれている。第2因子は授業妨害で、授業が始まって遊んでいる等が含まれる。第3因

子は胃腸症状で、はく・下痢・腹痛等の症状が含まれる。第4因子は言動異常で、急に目が見えなくなる・異常に水を飲む等が含まれる。第5因子はチック症状で、首を振る・眼をパチパチする等が含まれる。第6因子は胸部苦悶で、息が苦しい・胸が苦しい等が含まれる。第7因子はめまいで、目が回る・立ちくらみが含まれる。第8因子は薬物依存で、シンナーを使用した等が含まれる。いじめはこのように、身体的な症状から精神的な症状まで多くの影響を与えていると言え、不登校、次のいじめ等へとつながっていくといえる。

上記のように、いじめの影響は多くは消極的なものであり、いじめの指導としては被害者の短期的な影響に注目し対処をしていく傾向にあるといえるが、一方で、いじめはその影響を青年期後期まで与えているともいえる。荒木（2005）によれば、低い自尊心や対人恐怖などといったいじめの症状は、いじめ直後だけでなく、人格が完成される青年後期まで影響が及ぶとされている。坂西（1995）は、いじめの長期的な影響を身体的カテゴリー・活動的カテゴリー・社会的カテゴリー・心理的カテゴリーに分け、青年期後期にあたる大学生期においてもいじめの影響があることを示唆した。こうしたいじめの長期的な影響は、いじめ当時の心理的な苦痛が大きいほどその影響が大きいことが示唆されている。こうした影響の裏には、いじめによる認知の変化や友人関係等の環境の変化があるといえ、単純にいじめそのものの影響であるとするのは難しい。しかし、いじめによる否定的なスキーマが形成され、そのことによりいじめの否定的な影響が強化されるのだとしたら、いじめの長期的な影響は臨時的に捉える必要があるのではないかと、いえる（小野部・加藤，2007）。

以上のようないじめの消極的な面は多くの研究で評価され、被害者ケアとして実践に応用されているが、一方で、長期的にはいじめの積極的な影響もあるといえる。坂西（1995）によれば、いじめにより消極的な影響だけでなく、高い共感性や我慢強さなどといった積極的な影響もみられるとしている。また、香取（1999）はいじめの積極的な影響として他者尊重、精神的強さ、進路選択への影響の3つを挙げている。江原（2011）によれば、いじめの長期的な影響としての積極的な影響はいじめ当時に受けたいじめの悪影響やいじめを受けてから経過した年数に関係なく、現在属している集団や共通の趣味を持った友人との出会いなどといった環境的な要因が大きいとしている。このようにいじめの長期的な好影響は、いじめのそのものというより、いじめからの回復過程で学習されたと考えるべきである。このようにいじめの長期的な影響は負の側面だけではなく、正の側面を合わせ持った2つの側面があるといえる。

以上で述べた問題より、本研究における仮説と目的を述べる。本研究の目的は、いじめ当時と現在適応状態の間にあるいじめに関する変数の関係を明らかにすること、いじめの被害者だけではなくいじめの傍観者もいじめの影響を受けていることを明らかにし、いじめに対する特定の考え方がいじめ観として現在の適応状態に関連していることを明らかにすることである。いじめに対する研究分野は広いといえ、心理学・教育学だけではなく道徳教育・社会教育・精神医学・保健体育など様々な分野から研究されている。近年のいじめに関する研究は実践研究・実態調査

が主体であると言え、また、質的な研究が多いように感じる。そのため、量的研究におけるいじめの長期的な影響を評価することは、長期的な見通しや実証性が付与されるといえ、実践への応用や現場への新たな視点の導入に役立つと思われる。また、本研究においては、人格の完成を迎える青年期後期、また比較的いじめが少なく、自分が望んでいる集団に所属しやすいと思われる大学生期において、過去のいじめにおける影響を評価し、モデル化する。本研究において、いじめが青年後期まで続いていくという認識を広め、また、いじめが今の適応状態へ影響及ぼすモデルを明らかにすることで、いじめ理解への新たな視点を持ち込めたいと思う。本研究においては以下の2つを仮説として検討していく。

仮説1：被害者の理論図

本研究においては、下記の仮説 a, b, c と亀田・相良 (2011) におけるいじめ体験からの回復に関する質的調査におけるモデル (Figure1) を参考に以下のような理論図を作成し、これがいじめ被害者に当てはまるかどうかを検討していく (Figure2)。本研究では、いじめの長期的影響が、現在の適応とどのように関係しているのかについても検討する。荒木 (2005) によれば、低い自尊感情や対人恐怖などといったいじめの症状は、いじめ直後だけでなく、人格が完成される青年後期まで影響が及ぶとされている。

仮説 a：被害者のいじめ対処が相談の時は、サポートを介在して、いじめによる積極的な影響が強まる。一方、被害者のいじめ対処が無視の時は、いじめ深さを介在して、いじめによる消極的な影響が強まる。

八田 (2008) によれば、いじめへの対処としては積極的な対処と消極的な対処があり、積極的な対処をすることでいじめは解消に向かうことを示されている。本研究においてはいじめへの積極的な対処 (反撃・相談) を取ることでいじめの積極的な影響 (共感的理解・精神的強さ・進路選択への影響) に正の関連が、消極的な対処 (無視) を取ることでいじめの消極的な影響に正の関連が見られると仮定し、検討していく。また、消極的対処については、坂西 (1995) によると、いじめ当時の体験が心身に強い影響を与えるほど、長期的にもその影響は強いといえる。

仮説 b：サポートが多いほど、長期的には、いじめ積極的影響が強まる。また、サポートが多いほど、いじめ消極的影響が弱まる。

いじめに対して対処する際に相談は友好的な手段であると言え、いじめの解決だけではなく、いじめの影響を緩和する働きをされるとされている (荒木, 2005)。文部科学省 (2014) のいじめ認知に関する調査においても、先生・親への相談がいじめ発見のもっとも多い手段であることが示されている。一方で、いじめの相談をしたからと言って実際にいじめ被害者のサポートになっているとは限らない。そこで本研究においては、仮説 a における相談的いじめ対処とは別に身近な人からいじめを受けた際のサポートをうけたかどうかを調査する。サポートを多く受けている者ほど、いじめの積極的な影響に正の関連が、いじめの消極的な影響に負の

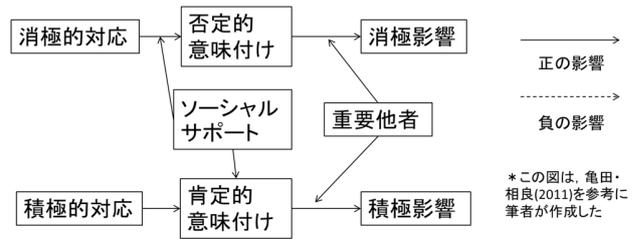


Figure1 いじめの影響に関するモデル

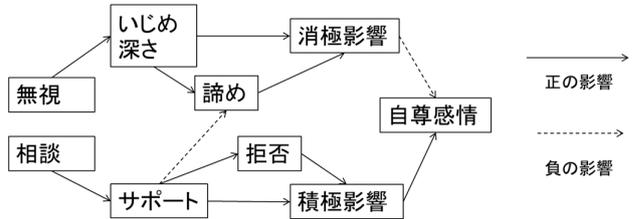


Figure2 いじめの影響に関する理論図

関連が見られると仮定し、検討していく。

仮説 c：いじめ観を仮説 a, b といじめの長期的影響との媒介変数と考える。

いじめ観とは、いじめに対してどのような考えを持っているかについてであり、いじめ観がいじめ当時の対処やサポートといじめの影響への媒介として働くことと仮定し、検討していく。これは、亀田・相良 (2011) を参考にしている (Figure1)。また、鈴木 (1998) によれば、いじめは暴力と同様に悪循環するといえる。本研究では、いじめの直後の影響とその後の長期的な影響を媒介する要因としていじめ観を検討していく。

仮説2：傍観者の理論図

いじめ傍観者はいじめ被害者と異なっていじめの影響を受け、回復の過程をたどる。

香取 (1999) によれば、いじめ傍観者はいじめ被害者・加害者に比べいじめの影響として同調傾向が強くなるとされている。本研究においても、いじめ傍観者といじめ被害者のいじめ影響の違いを明らかにし、いじめ影響を受けるまでの過程も探索的に検討していく。

2. 方法

・調査協力者

関西地区3大学の短期大学生・大学生・大学院生597人に質問紙調査を行った。授業終了後に担当教員の許可を得て、一斉配布式による質問紙調査を行った。

・調査時期

2014/10/21~2014/12/8

・倫理面への配慮

いじめに関する質問は倫理面への配慮が必要であるといえ、調査を始める前に研究の主旨と質問紙の保存方法、データの処理について説明し、質問紙はいつでも不利益なくやめることができることを伝えた。加えて、連絡先といじめを想起することでおこる

問題について簡易に説明した用紙を配布した。また、この研究に際して神戸大学大学院人間発達環境学研究所倫理審査委員会の承認を得て、質問紙調査を行った。

・調査内容

質問紙はいじめに関する項目と今現在に関する項目から構成されている（全89項目）。

いじめに関する項目

① いじめの体験の有無に関する項目

いじめを体験（した・みた・された）したことがあるかどうかを、「はい」・「いいえ」の2択で答えてもらった。「いいえ」と回答した方には、⑨の質問にのみ回答を求めた。

② 「いじめ深さ」に関する項目

いじめが当時どの程度の影響を持ったものであったかを調べるために、中桐他（2008）を参考にいじめ直後にみられる症状から10項目の質問をした。「なかった」から「よくあった」までの4件法で回答してもらった。

③ いじめ立場に関する項目

いじめをどのような立場で経験してきたかを答えてもらった。「被害者」、「加害者」、「傍観者」の3択から選んで答えてもらった（複数選択可）。

④ 被害者のいじめ対処に関する項目

菱田他（2011）による、いじめを受けた際にどのような対処行動を行ったかを調べる尺度である。森田他（1999）による全国レベルの実態調査の中で多かった対処方法に「気にしないふりをした」を加えた12項目を選び、そこから妥当性に欠ける2項目を削除した10項目からなる。いじめ被害経験のある方に回答してもらった。「はい」・「いいえ」の2件法で回答してもらった。因子として3因子に分けられ、第1因子は3項目からなる「攻撃」（ $\alpha = .71$ ）、第2因子は3項目からなる「相談」（ $\alpha = .63$ ）、第3因子は「無視」（ $\alpha = .61$ ）と命名されている。

⑤ 傍観者のいじめ対処に関する項目

中桐他（2008）による、いじめを目撃した際にどのような対処をしたのかに関する質問である。いじめ傍観者体験がある方に答えてもらった。積極的な対処行動として、励ましや注意、相談等の対処行動とったかどうかについて、全10項目、「はい」・「いいえ」の2件法で回答してもらった。

⑥ いじめへのサポートに関する項目

いじめを受けた際に、親・きょうだい・友人・担任・学校の5項目から、サポートがあったかどうかを質問する。「なかった」から「よくあった」までの4件法で回答をしてもらった。

⑦ いじめ観に関する項目

四辻・瀧野（2011）による、いじめに対する考え方に関する尺度。全10項目からなり、「大いに反対」から「大いに賛成」までの5件法で回答してもらった。いじめは防げないとする「いじめ諦め」と、いじめは決して許されないものとする「いじめ拒否」の2因子から構成されることが確認されている。

今現在に関する項目

⑧ いじめ影響尺度

香取（1999）による、過去のいじめ体験が、現在にどのような

影響を与えるかについての尺度である（ $\alpha = 0.94$ ）。いじめ被害に関する先行研究（坂西，1995）とPTSDの症状を参考に作成された47項目からなる尺度から、妥当性に欠ける5項目を除いた42項目から構成される。「全くそう思わない」から「全くそう思う」までの4件法で回答してもらった。6因子構造をとるとい（説明率=54.85）、第1因子を15項目からなる情緒不安定（ $\alpha = .91$ ）、第2因子を8項目からなる他者尊重（ $\alpha = .91$ ）、第3因子を7項目からなる同調傾向（ $\alpha = .89$ ）、第4因子を5項目からなる他者評価への過敏（ $\alpha = .88$ ）、第5因子を5項目からなる精神的強さ（ $\alpha = .87$ ）、第6因子を2項目からなる進路選択への影響（ $\alpha = .93$ ）と命名されている。また、いじめに関する影響尺度は「積極影響」（他者尊重、精神的強さ、進路選択への影響）と「消極影響」（情緒不安定、同調性、他者評価への敏感性）の2因子からも説明できることを示唆している。

⑨ いじめを経験したことのない人への質問

問1で「いじめを体験したことがない」と答えた方に、大学生用友人関係尺度（岡田，1995）を答えてもらった。質問紙回答終了の時間を「いじめ体験がある」と回答した方とそろえるために使用した。本研究においては分析対象にしない。

⑩ 自尊感情尺度—日本語版—（山本・松井・山成，1982）

人が自分自身について感じる価値と能力に関する感覚および感情である、自尊感情に関する尺度である。Rosenbergによれば、「自尊感情」は自分がとても良いと感じる側面と自分はこれくらいという2側面から構成されているといえ、Rosenberg自尊感情尺度は後者のこれくらいという自尊感情に関する質問である。本研究においては、Rosenberg自尊感情尺度を山本他（1982）が邦訳したものを使用した。10項目からなり、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で回答してもらった。

3. 結果

・調査協力者全体の傾向について

調査協力者は全体 $N = 597$ であり、そこから学年・年齢・性別を除いた欠損値のあるデータを除いた、 $N = 474$ を分析対象とした。男性197名女性271名で、有効回答率は79.40%であった。年齢は18~28歳で平均は19.80歳（ $S.D = 1.44$ ）であった（Figure3, Figure4）。この結果から、いじめ加害者は12名と少なくなったことから、分析から除外した。

本研究において使用した尺度について検定した（Table1）。被害者のいじめ対処に関する項目と傍観者のいじめ対処に関する項

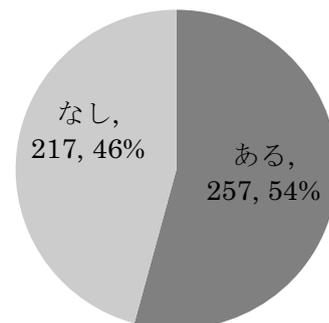


Figure3 いじめ体験有無

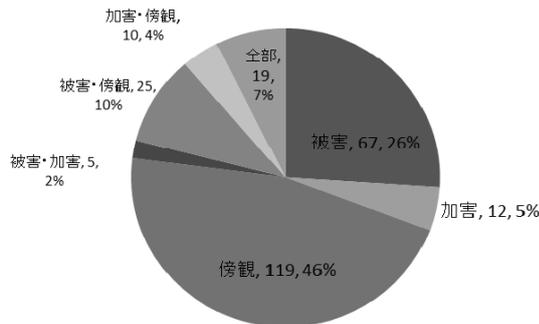


Figure4 いじめ体験者における立場

目の α 係数が低い結果となったが、先行研究から信頼性が確保されていると判断し、使用した。

Table 1 使用尺度の平均値、標準偏差、 α 係数

項目	N	平均	標準偏差	信頼性 α
自尊感情	474	30.53	7.08	.85
いじめ深さ	257	22.49	7.63	.91
反撃	116	1.08	1.07	.62
相談	116	1.12	1.08	.59
無視	116	2.36	1.24	.53
傍観対処	173	1.41	1.55	.63
サポート	257	8.31	3.19	.71
拒否	257	14.94	3.39	.81
諦め	257	14.58	4.41	.80
積極影響	257	36.45	9.04	.91
消極影響	257	58.84	15.07	.92
いじめ影響	257	95.30	20.62	.93

次に、 t 検定による平均値の差の検定を行った。

いじめ経験のあるなしで平均値の差を比較したところ、自尊感情に有意な差は見られなかった。いじめ被害者といじめ体験なし者、いじめ傍観者といじめ体験なし者についても自尊感情に有意な差は見られなかった (Table2)。

Table 2 いじめ体験有無における自尊心の比較

項目	t 値	平均値	有意差	d
いじめ体験有 いじめ体験なし				
自尊感情 (df=472)	0.22	30.57	30.47 n.s	0.02
いじめ被害者 いじめ体験なし				
自尊感情 (df=337)	0.32	30.06	30.47 n.s	0.04
いじめ傍観者 いじめ体験なし				
自尊感情 (df=388)	0.23	30.44	30.47 n.s	0.02

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

男女差について平均値の差を比較したところ、いじめ経験有無・諦め (以上 $p < .01$)・自尊感情・反撃 ($p < .05$) で男性が女性に比べ有意に高いことが示された。一方、拒否・積極影響・消極影響・いじめ影響全体 ($p < .01$)・いじめ深さで女性が男性に比べ有意に

Table 3 男女差の比較

項目	t 値	平均値		有意差	d
		男子	女子		
いじめ体験有無	3.10	1.54	> 1.40	**	
自尊感情	2.23	31.34	> 29.87	*	0.20
いじめ深さ	-2.30	21.05	< 23.32	*	0.30
反撃	2.46	1.42	> 0.91	n.s	0.27
相談	0.09	1.13	> 1.11	n.s	0.00
無視	1.62	2.63	> 2.24	n.s	0.30
傍観対処	-1.88	1.12	< 1.58	*	0.32
サポート	-0.85	8.11	< 8.46	n.s	0.11
拒否	-2.84	14.15	< 15.40	**	0.37
諦め	4.11	16.03	> 13.75	***	0.54
積極影響	-3.08	34.34	< 37.87	**	0.40
消極影響	-2.83	55.34	< 60.83	**	0.37
いじめ影響	-3.43	89.68	< 98.70	**	0.45

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

高いことが示された (Table3)。

いじめ被害者体験のある男女差について平均値の差の検定を行ったところ、反撃において、男性が女性よりも有意に高い傾向が見られた (Table4)。

Table 4 被害者における男女差の検討

項目	t 値	平均		有意差	d
		男子	女子		
自尊感情	-0.74	30.50	29.85	n. s	0.08
いじめ深さ	0.41	25.37	26.18	n. s	0.13
反撃	-0.64	1.42	> 0.91	*	0.49
相談	0.39	1.13	> 1.13	n. s	0.00
無視	-1.46	2.63	> 2.26	n. s	0.30
サポート	0.91	9.24	8.99	n. s	0.08
拒否	2.46	14.39	15.41	n. s	0.40
諦め	0.02	15.37	14.51	n. s	0.18
積極影響	1.53	37.66	39.67	n. s	0.23
消極影響	-1.28	60.37	64.85	n. s	0.33
いじめ影響	-1.48	98.03	104.51	n. s	0.37

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

いじめ傍観者体験のある男女における各尺度の平均値の差を比較すると、男性は諦め ($p < .01$) において女性よりも有意に高い傾向が見られた。一方、女性は積極影響 ($p < .01$)・傍観対処・拒否 ($p < .05$) において男性よりも有意に高い傾向が見られた (Table5)。

Table 5 いじめ傍観者における男女差の比較

項目	t 値	平均		有意差	d
		男子	女子		
自尊感情	-0.14	30.39	30.54	n. s	0.02
いじめ深さ	-1.75	20.36	22.48	n. s	0.28
傍観対処	-2.00	1.08	< 1.58	*	0.32
サポート	-1.82	7.42	< 8.33	n. s	0.29
拒否	-2.14	14.29	< 15.42	*	0.34
諦め	4.54	16.05	> 13.34	***	0.73
積極影響	-2.77	33.14	< 36.75	**	0.45
消極影響	-0.80	56.59	58.54	n. s	0.13
いじめ影響	-1.71	89.73	95.29	n. s	0.28

*: $p < .05$ **: $p < .01$ ***: $p < .001$

・被害者分析

$N = 116$ を対象に分析を行った。男性38名、女性78名であった。年齢は18~28歳で平均は20.08歳 (1.79) であった。

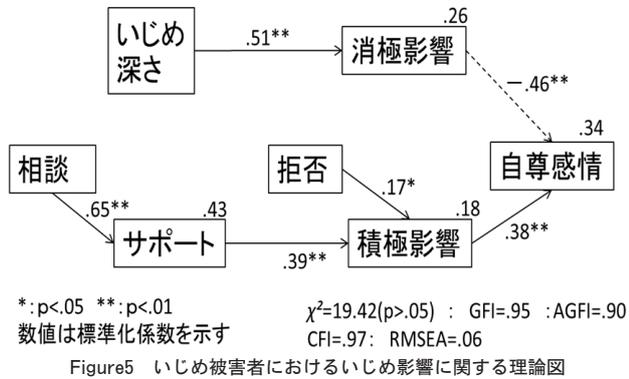
次に、各尺度について相関分析を行ったところ、いくつかの点で有意な相関が見られた (Table6)。

Table 6 被害者における相関分析

	自尊感情	いじめ深さ	反撃	相談	無視	サポート	拒否	諦め	積極影響	消極影響	いじめ影響
自尊感情	1.0	-.040	.122	.064	.139	.224 *	-.026	.158	.205 **	-.298 **	-.156
いじめ深さ		1.0	-.167	.176	.227 *	.154	-.059	-.088	.171	.508 **	.479 **
反撃			1.0	.156	.127	.105	.166	.044	.075	-.117	-.053
相談				1.0	-.049	.655 **	.095	-.018	.227 *	-.007	.108
無視					1.0	-.14	.033	.143	.0	.073	.056
サポート						1.0	.102	-.026	.401 **	-.045	.165
拒否							1.0	-.454 **	.210 *	-.026	.065
諦め								1.0	.066	-.174	-.102
積極影響									1.0	.167 *	.645 **
消極影響										1.0	.871 **
いじめ影響											1.0

*: 相関係数は片水準で有意 (両側) **: 相関係数は片水準で有意 (両側)

相関分析を参考に、共分散構造分析を行った。仮説の理論図を参考に以下のようなモデルを作成した ($\chi^2=19.42$ ($p>.05$): GFI = .95 : AGFI = .90 : CFI = .97 : RMSEA = .06) 各標準化推定値は、 $p < .01$ であり、妥当性が確認された。またモデル全体の妥当性も RMSEA が少々高いが、確認されたといえる (Figure5)。



・傍観者分析

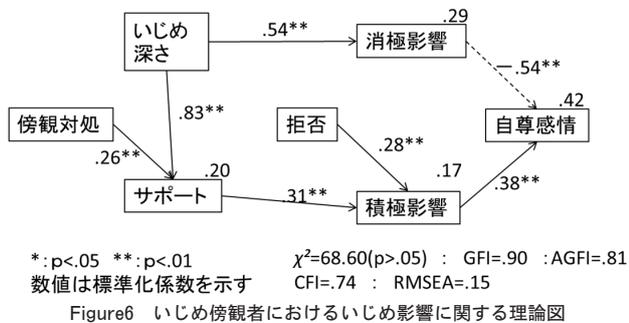
N = 173を対象に分析を行った。男性59名、女性112名、不明者2名であった。年齢は18~25歳の範囲で平均値は19.94 (1.39)であった。

各尺度について相関分析を行ったところ、いくつかの点で有意な値が見られた (Table7)。

Table 7 いじめ傍観者における相関分析

	自尊感情	いじめ深さ	傍観対処	サポート	拒否	諍め	積極影響	消極影響	いじめ影響
自尊感情	1.0	-.122	.126	.135	.078	.036	.155 *	-.405 **	-.238 **
いじめ深さ		1.0	.141	.368 **	.066	-.099	.310 **	.539 **	.529 **
傍観対処			1.0	.309 **	.111	-.115	.165 *	-.034	.043
サポート				1.0	.162 *	-.074	.347 **	.184 *	.280 **
拒否					1.0	-.328 **	.327 **	.072	.188 *
諍め						1.0	-.113	-.086	-.119
積極影響							1.0	.447 **	.746 **
消極影響								1.0	.929 **
いじめ影響									1.0

相関分析を参考に共分散構造分析を行った。仮説の理論図を参考に以下のようなモデルを作成した ($\chi^2=68.60$ ($p>.05$): GFI = .90 : AGFI = .81 : CFI = .74 : RMSEA = .15)。モデル図全体としては、AGFI・CFI・RMSEAの得点が十分であるとは言いがたく、妥当性に欠けるといえる (Figure6)。



4. 考察

本研究においては、調査協力者をいじめ経験の有無、またいじめ経験が有るものはいじめ被害者・加害者・傍観者に分けて分析

した。まずいじめ体験全体の仮説を検証した上で、いじめ被害者・傍観者における仮説の検証をしていきたいと思う。

・いじめ体験の傾向として

まず、本研究においては、いじめ体験の有無によって自尊感情に差があるかどうかを調べた。いじめ加害者については本研究からは考察できないが、少なくとも、いじめ被害体験や傍観体験をしたからといって、自尊感情が有意に低下するわけではないことがわかった。本研究においては大学生の現在の自尊感情を検討したため、いじめの長期的な影響としては自尊感情の低下を説明できないが、いじめの短期的な影響としては自尊感情の低下があることは否定できない。また、吉川・今野・会沢 (2013) によれば、いじめられる子の特徴としても自尊感情の低さは認められ、いじめを受けたことにより自尊感情が低下したかどうかはまだ検討中であるといえる。いじめ直後の自尊感情の低下やいじめの要因としての自尊感情の低さについては今後検討が必要である。

また、本研究では、男性が有意に多くいじめを体験していたといえる。一方で、いじめ影響の質的な面でいじめの影響に男女差がでていたといえる。本研究においては、女性の方が有意にいじめ深さを感じていた。これは、坂西 (1995) によれば、女子より男子の方が体に不調を感じる人が多いが、男子より女子の方が人の態度に敏感になり、気持ちをよく考えるようになる傾向が強いといえる。本研究においては、いじめ深さに関する質問項目が心理的な症状に偏っていたため、女性が有意にいじめの深さを感じているという結果が出たといえる。これは、西野・氏家・二宮・五十嵐・井上・山本 (2011) においても、同様の結果がみられるといえる。しかし、一方で、本研究において男女差が出るのは、いじめ被害者においてではなく、いじめ傍観者において出ているといえる。つまり、男女におけるいじめ影響の差はいじめの構造における傍観者の位置づけの男女差であると言え、それがいじめ内容、そしていじめ対処・いじめ影響に関係しているのではないかと考えられる。いじめ傍観者においては、本研究において、女性が男性よりいじめ傍観積極対処を有意に多く行うことが示されている。これは、中桐他 (2008) においても確認されたことであると言え、特に相談をするという点において女性は男性よりもいじめに関わっているといえる。このように、男女差はいじめの質的な違いが見られ、その質的な違いはいじめの発生に関わっていると考えられる。また、本研究においては、被害者対処において全体として特に反撃について男性が有意に高かったという結果が見られた。これも、いじめ内容の違いからみられるいじめ対処方略の男女差であると言え、山口・長野 (2012) においても確認されることである。加えて、山口・長野 (2012) は、こういった対処行動ののちの人間関係に与える影響について示唆している。荒木 (2005) によれば、男性は嫌がらせ・暴力といった身体的ないじめ被害を、女性は仲間外れ・嫌がらせといった人間関係に関するいじめ被害を受けやすいといえる。

・いじめ被害者に関する仮説の検証

仮説1：被害者の理論図の検証

仮説1はおおむね支持された。いじめ影響に関する理論図に関

する仮説の検討の結果、いじめ被害者のいじめ体験が今現在に与える影響として、理論図を得る事が出来た。以下に理論図内の仮説を検討する。

理論図全体からいえることとしては、積極影響と消極影響はいじめ発生から交わることはなかった。そのため、いじめ影響はある程度分離しているものであり、いじめ当時の影響からは別々に形成されているものだと考えるのが妥当ではないかと思われる。一方で、双方に関わる要因として、いじめ体験後の環境などが考えられるが、いじめ被害体験者はいじめ体験なし者と比べて、いじめ体験後に有意に多く対人ストレスイベントを経験しているわけではないことが示されている(荒木, 2005)。一方で、山口・長野(2012)によれば、過去のいじめ体験が今の友人関係に影響していると感じる大学生は53%ほどおり、特に自己閉鎖・傷つけられることへの回避に有意な差が見られるとしている。いじめ体験によって、対人問題が有意に多いとは言えないが、いじめは明らかに対人関係に影響を与え、今後検討の余地があるといえる。

仮説 a : 被害者のいじめ対処が相談の時は、サポートを介在して、いじめによる積極的な影響が強まる。一方、被害者のいじめ対処が無視の時は、いじめ深さを介在して、いじめによる消極的な影響が強まる。

仮説 a は一部支持された。本研究において、仮説 a の前半は支持された。これは、先行研究の結果を支持している。一方で、いじめを体験した際の対処行動は、直接は青年期におけるいじめの影響には肯定的にも否定的にも関与していなかった。これは、いじめの対処そのものはいじめの解決には関係しており、その後の環境要因に影響するが、いじめの長期的な影響としては、いじめ体験後の友人・集団との関係などが大切であるといえるのではないだろうか(山口・長野, 2012)。本研究においても、いじめの深さがいじめ無視と正の弱い相関がみられ、サポートが相談と正の中程度の相関をしており、いじめ深さはいじめ消極影響とサポートはいじめ積極影響と有意な正の相関がみられることが分かっている。一方で、坂西(1995)によれば、いじめの対処方略によりいじめの解決に向かう割合が大きくなることを示しており、荒木(2005)はいじめの解決に向かうとするコーピングスタイルは不安や抑うつ保護因子として抑制する形で働くとしている。これは、いじめの対処は一時的にはいじめの深さを緩和する要因である可能性を示唆しており、今後検討が必要であるといえる。

仮説 b : サポートが多いほど、長期的には、いじめ積極的影響が強まる。また、サポートが多いほど、いじめ消極的影響が弱まる。

仮説 b はおおむね支持された。本研究においては、仮説 b の前半が支持された。いじめを体験した際にサポートを受けていたか否かは、いじめの肯定的な影響に中程度の有意な正の相関を示しており、いじめ体験からの成長の一助となっているといえる。これは中桐他(2008)も示唆している事であり、いじめを気づいてもらった50%がいじめの苦しみは緩和されたとしている。一方で、消極影響との間に負の有意な相関を見せることはなかった。これ

は先行研究と異なる結果であるといえる。その理由として、本研究においては、いじめのサポートがいじめられた当時であったかどうかを聞いたが、それ以外の時期における友人や集団については検討していなかったためだと考えられる。亀田・相良(2011)は、重要他者(いじめからいくらか経過した後に自分のいじめ体験について話せた人)はいじめの否定的な影響を和らげる存在であるとしている。また、江原(2011)によれば、共通の趣味を持った友人の存在がいじめ積極影響に正の関連が、いじめの消極的な影響に負の関連が見られた。つまり、いじめ体験した際のサポートは肯定的な影響を促進するものとして、いじめから一定期間たった後のサポートは、いじめの否定的な影響を抑制するものとして、いじめ被害者の援助になっているといえるのではないだろうかと思われる。

仮説 c : いじめ観を a, b といじめの長期的影響との媒介変数と考える。

仮説 c は支持されなかった。本研究においては、いじめ観はどのように形成されるか、明らかにならなかった。本研究で見えてきたように、いじめ観では、いじめ体験の立場・いじめ当時の影響などを説明できない。一方、いじめ観は男女差があり、その差はいじめ内容によって説明できることが考えられる。藤原・鶴飼(2009)や三島(2009)によれば、女性は男性よりも関係性の影響を強く受けているといえる。また、いじめ内容は男女の文化的な考え方の違いを反映しているともいえ、いじめ観は男女の価値観や人生観の違いなどが反映されている可能性や、男女のいじめの構造の違いにより説明できるかもしれない。今後検討が必要であるといえる。

・いじめ傍観者に関する仮説の検討

仮説 2 : いじめ被害者と異なったいじめの影響を受け、回復の過程をたどる。

これは探索的な仮説であるといえる。本研究においては、いじめ傍観者のいじめ体験が今現在に与える影響として、理論図の作成を試みた。しかし、いじめ傍観者の理論図は妥当性に疑問が残るといえる。その原因として、いじめ被害者といじめ傍観者のいじめ体験からの影響を受け方の違いはやはり検討しなければならない。

本研究において、いじめ被害者といじめ傍観者の異なる点としては、いじめ深さがサポートに有意な正のパスを出している事がいえる。この結果は、被害者とは異なった特徴であるといえる。これは、いじめを見たことでその影響を受け、その結果サポートを受けることが多くなり、それが積極影響に正の関係を示している。一方で、いじめ傍観者を一括りで分析するのはいじめの現場的には疑問が残るといえる。水野(2012)によれば、いじめ場面において「いじめ傍観者」という分類はおかしいといえる。いじめを目撃したもので、なにも対処しなかったものが傍観者であり、対処したものは援護者、逆に加害者を援護したものは観衆といった3つからいよめる「傍観者」は成り立っているという事が出来る。今後、いじめを目撃したものを分析する際には、考慮すべき

点であるといえるのではないだろうか。

・今後の展望

本研究では、いじめ積極影響といじめ消極影響は、いじめ当時に受けた影響や援助・対処行動から、それぞれ独立して影響を受けていることが分かった。積極影響のために、ここで大切になるのは、いじめからある程度時間がたった後の援助ではないかといえる。先行研究からも、いじめは、いじめ被害者に多大な精神的身体的苦痛を与えるものであり、できる限り未然に防ぐべきものである。ただし、いじめが生じてしまった場合に、積極的な影響に結びつけていく必要がある。その際に重要なのは、いじめ体験からある程度時間が経過したときの友人関係や体験であると考え、今後検討していきたい。加えて、本研究では、いじめ内容やその背景にある男女の集団の差を考慮していじめの影響を考える必要があること、いじめを経験した立場によりいじめの影響の受け方は異なることが示唆されたといえ、その差に配慮した研究が必要であるということが課題となった。

引用文献

- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, **14** (1), 54-68.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, **11** (2), 105-115.
- 江原 稔 (2011). いじめ被害による長期的な影響を緩和する要因に関する基礎的研究 人間科学研究, **24** (1), 59-59.
- 深谷和子 (1996). 「いじめ世界」の子どもたち—教室の深淵 金子書房
- 藤原正光・鶴飼彩乃 (2009). 親しい友人間における「いじめ」と性差：小学生の場合 文教大学教育学部紀要, **43**, 71-79.
- 八田純子 (2008). いじめ被害経験者の原因帰属および対処法 愛知学院大学論叢心身科学部紀要, **3**, 89-94.
- 菱田一哉・川畑徹朗・宋 昇勲・辻本悟史・今出由紀子・中村晴信・李 美錦・堺 千紘・菅野 瑤・三島枝里子・島井哲志・西岡伸紀・石川哲也 (2011). いじめの影響とレジリエンシー, ソーシャル・サポート, ライフスキルとの関係—新潟市内の中学校における質問紙調査の結果より 学校保健研究, **53** (2), 107-126.
- 亀田秀子・相良順子 (2011). 過去にいじめ被害体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討—いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討— カウンセリング研究, **44** (4), 277-287.
- 香取早苗 (1999). 過去にいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, **32** (1), 1-13.
- 国立教育政策研究所 (編) (2013). 平成24年度教育研究公開シンポジウム—「いじめについて、わかっていること、できること。」 悠光堂
- 三島浩路 (2009). 高校生にみられる「いじめ」行動と「いじめ」に関連する要因 現代教育学部紀要, **1**, 119-128.
- 水野正幸 (2012). いじめ場面における目撃者の役割取得と共感がその後のいじめ関連行動に及ぼす影響 創価大学大学院紀要, **34**, 293-318.
- 文部科学省 (2014). 平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省 2015年10月16日 <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016708>> (2015年1月16日)
- 森田洋司・清水賢二 (1994). いじめ—教室の病い— 金子書房.
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井弥一 (1999). 日本にいじめ—予防・対応に生かすデータ集 金子書房.
- 餅川正雄 (2010). 学校にいじめ問題に関する研究 (IV) 広島経済大学研究論集, **33** (3), 43-57.
- 中桐佐智子・岡本陽子・澤田和子 (2008). いじめを受けた時の自覚症状と対処行動に関する研究 吉備国際大学保健科学部研究紀要, **13**, 27-34.
- 西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐 敦・井上裕光・山本ちか (2011). 中学生のいじめ被害と抑うつとの関連における男女差についての縦断的検討 日本教育心理学会総会発表論文集 (53), 474.
- 野中公子・永田俊明 (2012). 過去にいじめ体験が青年期に及ぼす影響—体験の時期と発達の関連 九州看護福祉大学紀要, **12** (1), 115-124.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- Olweus.D. (1993). *Bullying at school what we know and what we can do. Understanding children's worlds.* Wiley-Blackwell. (松井養夫・角山 剛・都築幸恵 (訳) (1995). いじめ こうすれば防げる 川島書房)
- 小田部貴子・加藤和生 (2007). 反復性のつらい体験によって形成される「心の傷スキーマ」の実証的研究：闕下感情ブラッキングパラダイムを用いて パーソナリティ研究, **16** (1), 25-35.
- 清水貴裕・瀧野揚三 (1998). いじめの加害者に影響する被害者と第三者の反応 大阪教育大学紀要IV教育科学, **46** (2), 347-363.
- 鈴木智之 (1998). 学校における暴力の循環と「いじめ」：大学生を対象にした回想形式の調査結果を起点として 社会労働研究, **45** (2), 155-192.
- 遠山宜哉・豊嶋秋彦 (1998). 大学新入生がふりかえって見た「いじめ」の体験 弘前大学保健管理概要, **19**, 13-32.
- 山口由加・長野恵子 (2012). 過去にいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響 西九州大学大学院健康福祉学研究科紀要, **43**, 39-48.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造教育心理学研究, **30** (1), 64-68.
- 吉田道雄 (2014). 人間行動における差別といじめ 熊本大学教育実践研究, **31**, 171-176.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2013). いじめの被害—加害体験と自尊感情との関係：大学生を対象にした適切的調査研究 人間科学研究**34**, 169-182.

四辻伸吾・瀧野揚三(2003). 大学生のいじめ観(Ⅰ)大阪教育大学紀要Ⅳ教育科学, 51(2), 309-320.

四辻伸吾・瀧野揚三(2011). 大学生のいじめ観(Ⅱ)大阪教育大学紀要Ⅳ教育科学, 60(1), 91-109.

謝辞

本論文は、平成26年度神戸大学発達科学部の卒業論文として提出されたものを一部改変したものです。本論文の作成にあたって、研究のデータの収集にご協力してくださった皆様、本当にありがとうございました。皆様方の貴重な時間を幾ばくかお借りし、本研究の調査を実施することができました。本当にお世話になりました。